

生活保護の誤解解く

生活保護を受けている人たちへの世間の誤解を解きたい。そんな思いで受給者や元受給者、支援者らが生活保護の実情を説明する出版物が相次いでいる。元受給者の実名や顔写真まで入ったインタビューが掲載されているケースもある。

(白井康彦)

季刊雑誌「はるまち」は昨年十二月に、第一号が出た。受給者や元受給者へのインタビュー記事がメインだ。

「受給歴を世間に知られると中傷されやすい。それでも明かして『当事者の顔が見える』状態にし、実態を知ってもらおう」と、社会活動家の湯浅誠さん(四四)が発案。東京都内に住む大学生の小林さよさん(三三)に企画を持ちかけ、知人らが協力した。

小林さんは幼いころから生活保護家庭で育った。生活保護制度がなければどうなっていたか。「その素晴らしい面を伝えたい」と意気込む。第二号の表紙などに登場した藤村真俊さんに

実情訴える出版物相次ぐ

(三)は、京都府京丹後市の職員。高校生のころ受給世帯だった。今は生活困窮者などを対象にした「寄り添い支援総合サポートセンター」の担当だ。はるまちは一部二百円で、A4判二十四ページ。問い合わせはメールで編集部＝info@harumi.achi.org＝。

昨年末には漫画「陽のあたる家」も発売された。主人公は夫と中学生の娘、小学生の息子と暮らす主婦。夫が病気で倒れて会社を退職し、生活に困って生活保護を受給したという物語。保護申請が心理的にすごく難しく、受給者が周囲から誤解されることなどを描

き、学校のスピーチ大会での娘の訴えで誤解が解ける場面で終わる。作者のさいきまごさんは「生活に余裕がなかった」と書く。「将来は生活保護かも」と考え始めた二〇一二年春、高給取りのお笑िताレントの母親が、生活保護を受けていたことが発覚。受給者をバッシングするような風潮が広まった。そこで「生活保護制度を正しく知ってもらおう」と、NPO法人「自立生活サポートセンター・もやい」で生活保護の申請同行なども体験し、生活保護制度をみっちり勉強したという。

一二年十二月に発刊された「生活保護とあたし」では、元受給者の女性が暮らしぶりを生々しく描写。「誤解されたまま批判されたくない」という当事者の思いも率直に伝えている。

昨年はフリーライターのみわよしこ、支援者側の稲葉剛、大山典宏の三氏らも生活保護の実像を伝えようと単行本を著した。表。

一方、自民党の片山さつき参院議員は一二年十一月、生活保護予算が増えすぎたとの視点から「正直者にやる気をなくさせる!」福祉依存のインモラル」を出版。お笑いタレントの問題を追及したことに激励の手紙やメールが大量に届いたことを紹介。「働こうと思えば働ける受給者が増えた」個人の勤労意欲や家族の絆を喪失させないよう、生活保護制度を改正せねばならぬと強調している。



近年さまざまな種類が出版されている生活保護関連の書籍

生活保護をテーマにした主な出版物

書名	著者など	出版社など
はるまち		一般社団法人はるまち
陽のあたる家	さいきまご	秋田書店
生活保護とあたし	和久井みちる	あけび書房
生活保護リアル	みわよしこ	日本評論社
生活保護から考える	稲葉剛	岩波新書
生活保護	今野晴貴	ちくま新書
生活保護VS子どもの貧困	大山典宏	PHP新書
正直者にやる気をなくさせる! 福祉依存のインモラル	片山さつき	オークラNEXT新書